

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：23903

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K18889

研究課題名（和文）Risk Based Monitoringによる医療安全管理ツールの開発

研究課題名（英文）Approach to risk based monitoring tool for patient safety management

研究代表者

秋山 直美（Akiyama, Naomi）

名古屋市立大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：20636534

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：医療安全対策のために収集されたインシデント・レポートデータを二次利用して、リスクを特定し、評価・監視することで質を保証しようとする治験分野のリスク管理法の一つであるRBM（Risk Based Management）の医療安全分野への応用を試みた。本研究の結果から、レポートのレベルや報告者の所属部署がRBMの一定の基準になりえると想定しえたが、レポートの意味や事象の多様性の角度から検討すると限界があると考えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療安全分野では「予防」の観点からのモニタリング手法の開発が急がれるが、肺血栓塞栓症の発症率・術後のイベント発生率といった特定診療分野のモニタリング、或いは、インシデント報告等に基づく事後的なモニタリングが主流である。医療安全上の「高リスク」を適切に「選択」し、業務の「集中」に役立つ補助ツール、しかもある程度、自動化を目指せるモニタリング手法の開発が医療安全管理業務には必須と考える。本研究を通して、RBMの今後の方向性を確認することはでき、研究期間を通して関連研究に関しても広く、公表を行った。

研究成果の概要（英文）：Risk Based Management (RBM), one of the risk management methods in the clinical trial area, is applied to the medical safety area, which aims at quality assurance through risk identification, evaluation, and monitoring through the secondary use of incident report data collected for medical safety measures. We attempted to apply RBM to the area of medical safety, which aims at quality assurance through risk identification, evaluation, and monitoring through secondary use of incident report data collected for medical safety measures. From the results of this study, it can be inferred that the level of reporting and the department to which the reporter belongs can serve as certain criteria for RBM, but there are limitations when considering the meaning of reporting and the diversity of events.

研究分野：医療安全管理

キーワード：医療安全 患者安全 安全管理 リスクマネージメント モニタリング リスクベースドモニタリング 根本要因 インシデントレポート

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

医療安全管理業務は事故・紛争処理といった「事後処理」から、同じことを再び繰り返さない「再発防止」、および、事故を未然に防ぐ「予防」に力点が置かれてきている。一方、高度化する医療や患者サービスへの期待等により、医療安全管理部門の取り扱う案件は複雑化、且つ、増大している。医療安全分野では「予防」の観点からのモニタリング手法の開発が急がれるが、肺血栓塞栓症の発症率・術後のイベント発生率といった特定診療分野のモニタリング、或いは、インシデント報告等に基づく事後的な遠隔モニタリング (Remote Monitoring; RM) や実地モニタリング (Source Document Verification; SDV) が主流である。医療安全上の「高リスク」を適切に「選択」し、業務の「集中」に役立つ補助ツール、しかもある程度、自動化を目指せるモニタリング手法の開発が医療安全管理業務には必須と考える。2016 年の医薬品の臨床試験等の方針を決定する医薬品規制調和国際会議で、リスクに基づくモニタリング (Risk Based Monitoring; RBM) の運用が謳われた。RBM は試験中のプロセスを厳密に管理することで、アウトプットされるデータの質を担保しようとする新しい概念である。RBM は調査票に入力された患者情報からプロトコルの逸脱等を探す「中央モニタリング (Centralized Monitoring; CM)」と、電話やメールによる RM、調査票とカルテ等に不一致がないかを照合する SDV から成る。RBM は効率的な SDV を可能とし、経済効果が見込めるとの報告が多数なされている。

臨床試験分野と医療安全分野は異なる研究分野ではあるが、共通点が多い。例えば、臨床試験の安全性に関わる有害事象等の収集は、医療安全分野では医療の安全性に関わる事象をインシデント報告書として収集している点と共通する。試験の結果に関わるような事象を未然に防ぐための臨床試験分野の SDV も、医療安全分野の事故調査や巡視等と重なる。その他、病院情報システム (Hospital Information System; HIS) には、クリニカルパスのバリエーション報告や診療群分類包括評価 (Diagnosis Procedure Combination; DPC) データ等の膨大な既存データが存在する。これら既存データを CM に関するデータとして収集するとともに、医療安全管理者の視点から RM・SDV の高リスク条件を調査することで、医療安全管理の視点から RBM 条件決定することは理論上、実現可能ではある。

2. 研究の目的

本研究は臨床試験分野で実装されている RBM を、医療安全分野へ応用する普及 & 実装科学研究の実施を目的とする。

3. 研究の方法

本研究の方法は、次の三段階から実施した。

CM のロジックを構築するために、まずは、適切にインシデントレポートが報告される仕組みを構築した。

CM のロジックを構築するため、A 病院のデータや公表データを用いて、インシデントレポートに影響する要因を網羅的に検討した。

の知見を基に、RBM を構築した。

4. 研究結果

1) 適切にインシデントレポートが報告される仕組みの構築¹⁾

CM を行うためには、有用なデータがインシデントレポートをとして報告されることが前提となるため、次の ~ の介入を行い、医師からのレポート報告数の増加を目指し下記の介入を行った。

報告基準の明確化: アクシデント報告基準を明文化して医療安全対策マニュアルに掲載し、医療安全関連委員会を通して周知した (2018 年 4 月)。

報告様式の改良し、インシデントレポートシステムを78問から35問に削減し、簡便化した(2018年4月)。

診療科別の報告数可視化:診療科別の報告数の分布を可視化し、病院長面談資料として活用した(2018年10月)。

加えて、診療科別の報告割合を一覧にして診療部長が出席する会議資料とした(2018年11月~)。

レポートの提出数の適正性は議論の分かれるところであるが、一説では「インシデントレポート総数が病床数の5倍、そのうち1割が医師からの報告」という目安を鑑みると、2018年度には適正な報告数に変化したと言える。

2)インシデントレポートに影響する要因を網羅的に検討

下記、(1)~(4)の研究を通して、CMのロジック構築のための要因の検討を網羅的に行った。

(1)職種によるインシデントへの影響

事務職²⁾

医師・歯科医師³⁾

歯科医療においては、外来で行われることも多い。プライマリケアにおける医療安全はこの分野の今後の課題と言われている。論文³⁾では歯科クリニックからの引継ぎ時のエラーも多く報告されていた。在宅医療の状況についても検討する必要があるため、歯科クリニックを運営する事業所の管理者にヒアリングを実施し、その内容を口頭で発表すると共に、寄稿として公表した⁴⁾。

看護職⁵⁾

看護職のインシデントレポートの報告例は数多く存在する。その中でも筆者が過去に関わったものとして臨床経験年数、部署配属年数によるヒヤリ・ハットの種別の発生傾向の差やクリニカルラダー別の報告傾向の差が確認された。臨床経験年数の特徴に関しては、医師・歯科医師でも観察されるところである。

病院介護士、保育士⁶⁾

一部の先進国においては、少子高齢化に伴う医療スタッフの不足に対する短期的な解決策として医療職から非医療職へのタスクシフトが進められている。本研究との関連として、事務職と同様、病院介護士・保育士においても、現行ではまだ報告例が少ないが、将来に渡って報告が増加するだろう事象について、本来はRBMの視点として加える必要があると考えられた。

(2)インシデントの種別の特徴

高頻度インシデント⁷⁾

薬剤関連、ドレーン・チューブ関連、転倒・転落のエラーは、医療機関において発生頻度の高いインシデントとして認識される。これら三種類のインシデントの発生傾向を掴むことはCMロジック構築するために必須である。データは2012年~2018年度の全インシデント報告36,364件のうち、三種のインシデント報告として全ての変数に入力があった16,383件(45.1%)として検討した。本研究はインシデント報告のデータを二次利用したものであり、利用できる情報には限りがあり、例えば、本研究で用いたデータでは報告者と当事者の区分が難しいことや、複数の報告者から同一事例について報告されていてもデータ上は区分ができないこと等が限界として挙げられる。しかしながら、毎年報告される膨大な数のインシデント報告を、量的データとして取り扱い詳細に検討すると、それぞれの発生状況に相違があることを概要ながらも確認できることがわかった。

窒息⁸⁾

CM のロジックとして、発生頻度が低い、患者へ深刻な影響を及ぼす可能性のある事象をどう取り扱うのか、課題として挙げられた。

人工呼吸器管理⁹⁾

人工呼吸器は患者の生命維持に直結する医療機器の一つであるが、人工呼吸器の医療安全に関する報告は、合併症報告を除き、報告数は数少ない。在宅用人工呼吸器を含め人工呼吸器及び関連機器は多様化しており、人工呼吸器管理に関する看護師の負担増大が危惧される。臨床工学技士の配置や、時間帯により人工呼吸器を管理する者のリスク認知力によっても、発生状況が変化する可能性があることが示唆された。

血液浄化療法装置¹⁰⁾

医療機器に関する事故は報告例が少ないものの、患者への影響が大きい事故の一つであり、また、血液浄化用機器関連ではひと時に複数の患者が事故にあう可能性が示された。CM のロジックとして医療機器関連の要因は重要なものの一つと考えるが、具体的な変数としてどう取り挙げるのかについては課題が残る。

(3) 医療状況による影響、COVID-19

派遣という雇用形態での医療安全¹¹⁾

部署異動による影響と同定度、もしくはそれ以上の影響を受ける集団として考えると、CM のロジック構築上、派遣業務に従事する者の存在は考慮の必要があると考えられた。

地域事業所への影響(投稿中)¹²⁾

プライマリケアにおける医療安全の特徴に関して、歯科医師の項で記載したところであるが、それ以外にも COVID-19 に関連した困難と事業継続に関して、地域事業所にヒアリングを行い、記述した。その報告については別途、英文雑誌に投稿中である。

看護基礎教育における COVID-19 の影響^{13,14)}

臨地実習の日数と技術の習得に関して関連は見られなかったことを論文として報告した²⁸⁾。COVID-19 禍により臨地実習での経験が少なかった世代の看護師においては、コミュニケーションエラーといった事象を体験する可能性があるかと推測するが、実際にエラーが多いのかということについては言及できない。CM のロジックの一つとして、基礎教育を受けた世代と社会的背景についても検討が必要と考える。

(4) その他の影響

医療系の学生¹⁵⁾

基礎教育において医療安全の知識を学修し、国家試験という形でその習熟度を計ることは理学療法士・作業療法士にも求められることと考える。一方で、両資格者によるインシデントの報告は少ない。CM のロジックとして両職種、及び、両学生を組み込む方がよいのかどうかはさらなる検討が必要である。

非医療専門職の認識¹⁶⁾

医療者と患者の間にある医療に関する情報の非対称性と、そもそも医療というもののアウトカムが不確実であることに起因する患者との認識のずれは、時として患者との争いや葛藤を生む。本研究の目的は非医療者と看護師の間にある医療の不確実性に関する認識の相違を検討し、相違があることを確認した。

5.RBMの構築に向けて¹⁷⁾

医療安全対策のために収集されたインシデント・レポートデータを二次利用して、リスクを特定し、評価・監視することで質を保証しようとする RBM の医療安全分野への応用を試みた。本研究の結果から、レポートのレベルや報告者の所属部署が RBM の一定の基準になりえると想定したが、レポートの意味や事象の多様性の角度から検討すると限界があると考えた。今後の研究の方向性について、二点述べる。一点目はレポート自体の豊かな情報を活用することである。レポートには数量データだけでなく、文字情報であるテキストデータも含まれており、情報量としては豊かである。レポートに含まれる数量データの分析だけでは情報量に限界があるため、レポートのテキストデータを活用したリスク抽出の方法が望ましいと考える。二点目は、病院内に存在する HIS(Hospital Information System; HIS)を活用し、RRS(Rapid Response System; RRS)で用いるデータや、心電図モニターなどのアラーム関連情報から客観的データを収集することである。報告者バイアスを提言するためにも、客観的データの収集が必要と考える。

引用文献: 該当多数となるため、主なものを下記に示す

- 1) Akiyama N, Koeda K, Ryuji U, Takahashi S, Ogasawara K. Implementing an Intervention to Improve Physicians' Incident Reporting in the Hospital Setting: A Pilot Study. Patient safety authority 4(1) 18-25 2020年7月16日
- 2) Naomi Akiyama, Tomoya Akiyama, Kenshi Hayashida, Takeru Shiroiwa, Keisuke Koeda. Incident reports involving hospital administrative staff: analysis of data from the Japan Council for Quality Health care nationwide database. BMC Health Services Research 1054(1) 1054-1054 2020年
- 3) Naomi Akiyama, Tomoya Akiyama, Hideaki Sato, Takeru Shiroiwa, Mitsuo Kishi. Comparison of physicians' and dentists' incident reports in open data from the Japan Council for Quality Health Care: a mixed-method study. BMC Oral Health volume 23(67) 2023年
- 4) 秋山直美. 在宅医療における医療安全. 岩手医科大学歯学雑誌 48 80-88 2024年
- 5) Akiyama N, Akiyama T, Hayashida K, Igawa J, Matsuno T, Kono R, Shiroiwa T, Koeda K, Kanda K. Differences in near miss incident reports across clinical experience levels in nurses: using national wide data base from the Japan council for quality healthcare. Patient Safety and Quality Improvement 7(2) 56-63 2019年
- 6) Naomi Akiyama, Shihoko Kajiwara, Takeru Shiroiwa, Tomoya Akiyama, Mie Morikawa. Reported Incidents Involving Non-medical Care Workers and Nursery Teachers in Hospitals in Japan: An Analysis of the Japan Council for Quality Health Care Nationwide Database. Cureus 14(2) e22589 2022年
- 7) 秋山直美, 魚住龍史, 秋山智弥, 林田賢史, 肥田圭介. 急性期病院における高頻度インシデントに関連する要因 薬剤・ドレーン・転倒転落に関する観察研究. 日本医療・病院管理学会誌 58(3) 71-81 2021年7月
- 8) Akiyama N, Uozumi R, Akiyama R, Koeda K, Shiroiwa T, Ogasawara K. Choking injuries: Associated factors and error-producing conditions among acute hospital patient in Japan. PLOS ONE 17(4) e0267430 2022年4月
- 9) Akiyama N, Kajiwara S, Tamaki T, Shiroiwa T. Critical Incident Reports Related to Ventilator Use: Analysis of the Japan Quality Council National Database. Journal of patient safety 19(1) 15-22 2023年.
- 10) 玉木高裕, 秋山直美, 梶原志保子. 血液浄化用機器関連の事故報告に関する要因分析 医療事故情報収集等事業の公開事例を用いた検討. 医療の質・安全学会誌 18(Suppl.) 306-306 2023年.
- 11) 秋山直美, 肥田圭介. 看護師の派遣業務に係る医療安全. 医療と安全 13 15-20 2021年.
- 12) 秋山直美, 松永 篤志, 伊藤 奈央, 武田 邦子, 森川 美絵, 秋山 智弥. 地域事業所への COVID-19 の影響に関するインタビュー調査～地域事業所管理者の視点から～. 第 41 回日本看護科学学会学術集会 41 回 in press-05 2021年.
- 13) 梶原志保子, 榎田恵子, 秋山直美, 永坂和子. 新型コロナウイルス感染症流行下における看護系大学生の臨地実習日数と看護技術到達度との関連. 保健医療科学 in press 2024年.
- 14) Akiyama N, Kajiwara S, Matsunaga A, Hayashida K, Akiyama T. On-campus nursing training during COVID-19 in Japan: A systematic literature review. Cureus 1-11 2023年.
- 15) 秋山直美, 梶原志保子, 宇佐美知子, 小島誠. 医療系基礎教育に求められる医療安全に関する教育～過去5年分の看護師国家試験と理学療法士国家試験の出題傾向を比較して～. 第6回日本ヒューマンヘルスケア学会学術集会 2023年.
- 16) Akiyama N, Kajiwara S, Uozumi R, Akiyama T, Sim J, Morikawa M. Perceptions of uncertainty in medical care among non-medical professionals and nurses in Japan: A cross-sectional Internet-based preliminary survey. Cureus 1-16 2024年
- 17) 秋山直美, 肥田圭介. Risk based monitoring による医療安全管理ツールの開発に向けた基礎研究. Precision Medicine 7(2) 50-53 2024年2月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 秋山直美, 肥田圭介	4. 巻 7
2. 論文標題 Risk based monitoringによる医療安全管理ツールの開発に向けた基礎研究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Precision Medicine	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akiyama Naomi, Kajiwara Shihoko, Uozumi Ryuji, Akiyama Tomoya, Hayashida Kenshi, Sim Jasmine, Morikawa Mie	4. 巻 2
2. 論文標題 Perceptions of Uncertainty in Medical Care Among Non-medical Professionals and Nurses in Japan: A Cross-Sectional Internet-Based Preliminary Survey	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Cureus	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7759/cureus.55418	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 秋山直美	4. 巻 48
2. 論文標題 在宅医療における医療安全	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 岩手医科大学歯学雑誌	6. 最初と最後の頁 80-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akiyama Naomi, Kajiwara Shihoko, Matsunaga Atsushi, Hayashida Kenshi, Akiyama Tomoya	4. 巻 27
2. 論文標題 On-Campus Nursing Training During COVID-19 in Japan: A Systematic Literature Review	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Cureus	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7759/cureus.49479	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Akiyama, Tomoya Akiyama, Hideaki Sato, Takeru Shiroiwa, Mitsuo Kishi	4. 巻 23
2. 論文標題 Comparison of physicians' and dentists' incident reports in open data from the Japan Council for Quality Health Care: a mixed-method study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 BMC Oral Health	6. 最初と最後の頁 67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12903-023-02749-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Akiyama, Shihoko Kajiwara, Takahiro Tamaki, Takeru Shiroiwa	4. 巻 19
2. 論文標題 Critical Incident Reports Related to Ventilator Use: Analysis of the Japan Quality Council National Database.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Patient Safety	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1097/PTS.0000000000001077	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Akiyama, Ryuji Uozumi, Tomoya Akiyama, Keisuke Koeda, Takeru Shiroiwa, Kuniaki Ogasawara	4. 巻 17
2. 論文標題 Choking injuries: Associated factors and error-producing conditions among acute hospital patient in Jap	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0267430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0267430	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Akiyama, Keisuke Koeda, Ryuji Uozumi, Fumiaki Takahashi, Kuniaki Ogasawara	4. 巻 4
2. 論文標題 Implementing an Intervention to Improve Physicians' Incident Reporting in the Hospital Setting: A Pilot Study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Patient safety authority	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.33940/culture/2022.3.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Akiyama, Shihoko Kajiwara, Takeru Shiroiwa, Tomoya Akiyama, Mie Morikawa	4. 巻 14
2. 論文標題 Reported Incidents Involving Non-medical Care Workers and Nursery Teachers in Hospitals in Japan: An Analysis of the Japan Council for Quality Health Care Nationwide Database	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Cureus	6. 最初と最後の頁 e22589
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7759/cureus.22589	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 秋山直美, 松永篤志, 幸野里寿, 井川順子, 秋山智弥	4. 巻 11
2. 論文標題 緊急入院時のインテーク面接に向けた病棟看護師の状況認識の構造化の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護評価学会誌	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋山直美, 肥田圭介	4. 巻 13
2. 論文標題 看護師の派遣業務に係る医療安全	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 医療と安全	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋山直美, 魚住龍史, 秋山智弥, 林田賢史, 肥田圭介	4. 巻 58
2. 論文標題 急性期病院における高頻度インシデントに関連する要因～薬剤・ドレーン・転倒転落に関する観察研究～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本医療・病院管理学会誌	6. 最初と最後の頁 71-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11303/jsha.58.71	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Akiyama, Tomoya Akiyama, Kenshi Hayashida, Takeru Shiroiwa & Keisuke Koeda	4. 巻 20
2. 論文標題 Incident reports involving hospital administrative staff: analysis of data from the Japan Council for Quality Health care nationwide database	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 BMC Health Services Research	6. 最初と最後の頁 1054
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12913-020-05903-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Naomi Akiyama, Tomoya Akiyama, Riju Kono, Kenshi Hayashida, Katsuya Kanda	4. 巻 10
2. 論文標題 Japanese nurses' competency on different clinical ladder levels: Using a mixed-methods approach.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Japan Academy Nursing Evaluation	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 秋山智弥, 秋山直美, 梶原志保子, 森川美絵, 林田賢史
2. 発表標題 医療を受けて納得できなかった経験について～一般市民と看護師を対象としたインターネット調査～
3. 学会等名 第43回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 竹田明弘, 秋山直美氏, 林田賢史
2. 発表標題 ジョブエンベディッドネスが看護師の離職, および職場満足に与える影響
3. 学会等名 日本経営学会九州部会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梶原志保子, 秋山直美, 秋山智弥, 魚住龍史, 林田賢史, 森川美絵
2. 発表標題 一般市民と看護師の医療の不確実性に対する耐性の相違(第二報) ~医療の不確実性に対する耐性に関連する要因に注目して~
3. 学会等名 第18回医療の質・安全学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋山直美, 梶原志保子, 秋山智弥, 魚住龍史, 林田賢史, 森川美絵
2. 発表標題 一般市民と看護師の医療の不確実性に対する耐性の相違(第一報) ~インターネット調査による横断調査結果から~
3. 学会等名 第18回医療の質・安全学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋山直美, 白岩健, 肥田圭介
2. 発表標題 Risk-Based Monitoringの医療安全分野への応用に向けた基礎研究
3. 学会等名 第61回日本医療・病院管理学会学術総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋山直美, 竹田明弘, 秋山智弥, 林田賢史
2. 発表標題 認定研究会事業に参加して ~認定研究会「医療の効率的な資源配分に関する研究~医療安全と人的資源管理に焦点を当てて~」
3. 学会等名 第61回日本医療・病院管理学会学術総会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Naomi Akiyama
2. 発表標題 Patient safety and Quality Improvement
3. 学会等名 3th online exchange seminar NCU and NTUNHS (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋山直美
2. 発表標題 臨地実習における看護学生のチームビルディング
3. 学会等名 第6回ヒューマンヘルスケア学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋山直美, 梶原志保子, 宇佐美知子, 小島誠
2. 発表標題 医療系基礎教育に求められる医療安全に関する教育～過去5年分の看護師国家試験と理学療法士国家試験の出題傾向を比較して～
3. 学会等名 第6回日本ヒューマンヘルスケア学会 学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋山智弥, 秋山直美, 安立なぎさ, 林田賢史
2. 発表標題 看護師配置が影響し得る患者アウトカムと看護に関する看護師と一般市民の意識のずれ ～インターネット調査の結果から～
3. 学会等名 第27回日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 秋山直美, 梶原志保子, 白岩健, 秋山智弥, 森川美絵
2. 発表標題 病院の介護士及び保育士による インシデントレポートについて
3. 学会等名 第42回 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶原志保子, 秋山直美, 玉木高裕, 白岩健
2. 発表標題 看護師の人工呼吸器に関する事故報告 ~ 医療事故情報収集等事業の公開データを用いた内容分析 ~
3. 学会等名 第42回 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋山直美, 梶原志保子, 玉木高裕, 白岩健
2. 発表標題 人工呼吸器関連の事故報告の要因分析 ~ 医療事故情報等収集事業の公開データを用いて ~
3. 学会等名 第17回 医療の質・安全学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋山直美, 松永篤志, 幸野里寿, 井川順子, 秋山智弥
2. 発表標題 緊急入院時のインテーク面接に向けた病棟看護師の状況認識の構造化の試み
3. 学会等名 第12回日本看護評価学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋山直美, 松永 篤志, 伊藤 奈央, 武田 邦子, 森川 美絵, 秋山 智弥
2. 発表標題 地域事業所へのCOVID-19の影響に関するインタビュー調査～地域事業所管理者の視点から～
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山 直美, 秋山 智弥, 魚住 龍史, 白岩 健, 森川 美絵, 肥田 圭介
2. 発表標題 誤飲・誤嚥・窒息に関連する要因の検討(第二報) 過去7年間のインシデント・レポートデータの内容分析
3. 学会等名 医療の質・安全学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山 直美, 魚住 龍史, 秋山 智弥, 肥田 圭介
2. 発表標題 高頻度インシデントに関連する要因
3. 学会等名 日本医療・病院管理学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山直美, 秋山智弥
2. 発表標題 非常事態にも対応できる病院管理体制の確保について考える - COVID-19の応援派遣を通して -
3. 学会等名 日本看護管理学会学術集会抄録集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山直美, 佐藤栄晃, 魚住龍史, 肥田圭介
2. 発表標題 医師と歯科医師における事故報告の相違について
3. 学会等名 日本医療安全学会学術総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山直美
2. 発表標題 医療安全講習会 実践編
3. 学会等名 八雲総合病院 医療安全講習会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山直美
2. 発表標題 医療安全講習会 基礎知識編
3. 学会等名 八雲総合病院 医療安全講習会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山直美, 肥田圭介, 魚住龍史, 高橋史朗, 小笠原邦昭
2. 発表標題 患者誤認に関連する要因の検討～過去7年間のインシデントレポートデータを用いて～
3. 学会等名 第58回 日本医療・病院管理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山直美、魚住龍史、肥田圭介
2. 発表標題 誤飲・誤嚥・窒息に関連する要因の検討～過去7年間のインシデントレポートデータを用いて～
3. 学会等名 第15回 医療の質・安全学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 秋山直美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 10
3. 書名 看護管理学学習テキスト第3版 看護サービスの質管理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	梶原 志保子 (Kajiwara Shihoko)		
連携研究者	肥田 圭介 (Koeda Keisuke) (10285596)	岩手医科大学・医学部・教授 (31201)	
連携研究者	秋山 智弥 (Akiyama Tomoya) (40310487)	名古屋大学医学部附属病院・卒後臨床研修・キャリア形成支援センター・教授 (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------